
幕末奇譚 『談話室』

夏月左桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幕末奇譚 『談話室』

【Nコード】

N5917Y

【作者名】

夏月左桜

【あらすじ】

幕末奇譚『志士 狂桜の宴』の息抜き談話。

幕末奇譚 『談話室其之一』

左桜「どうもどうも、お疲れ様です」

高杉「そう思うなら、とつとと俺を休憩（成仏）させてくれ」

左桜「え！ だめですよまだ。もう少しがんばって下さい」

桂「そんな事はどうでもいい。問題はだ、左桜くん」

高杉「そんなことって・・・（泣）」

左桜「はい」

桂「私に女装させた真意を聞かせて頂こうか!？」

左桜「え、乞食の方が良かったんですか？」

桂「・・・」

高杉「着物を脱がさんと、男だとわからん。 って書かれちよったなあ」

立ち直りが早いのも高杉の特技。

桂「脱がされたくもないわ!」

中岡「脱がしたい方ですよね」

ゴン！ 　なぜか高杉殴られる。

高杉「つたあああ!！」

左桜「（あえてスルー）いや、ほら。乞食の桂小五郎、より、美麗なる桂小五郎、の方がイメージ的にもいいかと思ひまして」

桂「確かに僕はいい男だし、高杉よりもてるのは確かだ」

高杉「うわっ、言った、言い切りよつた（頭いてえ!）」

武市「変装がなんだ。俺よりましな扱いだと思つが」

のっそりと高杉の背後から顔を覗かせる。

高杉「どっから出て来るんじゃ!」

武市「どこからでも構わん」

中岡「武市さんって、変な扱いされてました?」

武市「作者が主人公に男装させたせいで、変態扱いされたらろっが!」

中岡「和太郎の男装って言えば・・・俺だけ最後まで知らないとか、酷い扱いは俺の方だと思っんですが。（大久保さんまで知ってたし）」

左桜「それはですね、世間じゃ女の子に刀を持たすのが流行ってるもんで、ちよつと反抗してみたくなっただんです」

大久保「タイムスリップした女性が、何故か男装して刀を振るう話しも多いではないか」

一同「うわっ!?!」

いつの間にか、宇治茶の入った湯飲みを飲みながら、輪の中央に座って居る大久保。

桂「どつから沸いたんだ・・・」

大久保「人を虫みたいに言わないで頂きたい」

桂「人を虫扱いはしたのほなたでしたっけ？」

大久保「そんな失礼な奴がいるのか、けしからんな」

桂（おまえだ）

武市「そもそも、タイムスリップ自体時代遅れなネタだと思っが？」

中岡「武市さん、膝の上に和太郎を抱えないで下さい」

和奈（汗）

左桜「後々の作品の関係上、昭和と平成と幕末を繋げないと続かないもので」

高杉「あの二作目か。あの不当な設定も我慢ならん！なんで俺が桂さんの弟になるんじゃ！」

左桜「最初は、沖田君とおなじく、桂さんの恋人の役だったんですよー。あ、その方がやっぱ面白いかも！ちよつと筋書き変えてきます！」

高杉・桂「待て!!--」

左桜「ぐうえ！」二人に襟を引っ張られたらしい。

高杉「女役にされるのは中岡と沖田だけで十分じゃ！」

左桜「ぐふふつ（何か思いついたらしい）」

武市「あの設定は笑ったな。土方の女が沖田君とは・・・」

左桜「いつも仲良しでしょ」

以蔵「俺と中岡は仲良しでもなんでもないぞ！」

中岡「ですよ！」

武市「それについて、意見するところはない」

以蔵「先生（号泣）」

左桜「二作目の話題はおいといて。途中から大変でしたよ。松陰先生がどうしても出たといって、夢枕に立たれたんですから、連日」

手を返すと、松陰先生がその先に畳の上から少し浮て正座しています。

松陰先生「死しても、天君天下の為に僕でも役に立てるのであれば
とお願い致しました」

高杉「先生、正座する足ないんじゃないですか？」

松陰先生「高杉くん、細かい事に気を取られている様では、広くを見る事はできませんよ。土と謂うものは」

桂「松陰先生、講話は後ほど枕元でじっくりと高杉に聞かせてあげて下さい」

高杉「！！？」

そそつと大久保が松陰の前に座る。

大久保「一度お会いしたいと思っております。薩摩の大久保一蔵と申します」

松陰先生「ご丁寧な挨拶をありがとうございます。僕は吉田虎次郎と申します」

膝を付き合わせてお辞儀しあう二人。

武市「ご無沙汰しております」

そこへ武市も加わる。

松陰先生「これは、武市瑞山殿。確か、切腹なされたと伺いました
が」

武市「作者の身勝手な構想で生きながらえております」

松陰先生「ああ、そう言えば僕も幽霊で登場致しました。感謝すべき事です。また話を聞いてもらう機会ができた事は嬉しい限りで

す」

周布「ちよつといいかあああ！」

桂「!!」

高杉「周布さん!？」

周布「おい、左桜!」

左桜「は・・・はい(汗)」

周布「わしの登場が、なんで川長楼のぐっ!」

桂と高杉が周布の口を塞ぐ。

桂「誰だ、周布さんを召還したのは!」

松陰先生がニツコリと笑う。

高杉「先生、無謀な行いも大概にして下さい」

それでも静かに笑っている松陰先生。

周布「ええい! 放さんか!」

桂「長州藩の恥を晒さないで頂きたい!」

左桜「お酒、出します?」

桂「いらん事を言うな! 酒なんぞ出されたら余計にややこしくな

る!」

大久保「これ、薩摩の芋焼酎「薩摩藩」です。いつぞやのお礼にど

うぞ」

桂「!!」

周布「これは忝い! さすが内務卿を勤められたお方だ」

左桜「あのう・・・」

容堂公「酒か?」

武市「!」

容堂公「おお、武市ではないか。久しぶりじゃのう。息災か?」

武市「・・・」

中岡「容堂公、切腹言い渡したの忘れたんですか?」

周布「駆けつけに、ささ」

容堂公「コクコク」 渡された「薩摩藩」を一気飲み。

周布「今日は愛人をつれぐっむ」

桂「語るな！」

左桜「えーっつと。主だった方が登場なさったので、ここいらで一つ今後の方針を考えたいと思うんですけど、意見とかありますか？」

乾「私の登場回数を増やす、というのはどうだ？」

武市「げっ！」

乾「げっ、とはなんだ、武市」

武市「ボウフラの様にいきなり沸かないで頂きたい」

大久保「虫か？」

桂「まだ引つ張るんですか、あなたは」

大久保「はて？」

左桜（焦）

和奈「あの、いいですか？」

左桜「はい！」

和奈「私、いつになったら自分の事が解るんですか？」

左桜（ギクツ）

桂「戦闘シーンが少なくなったからな。なかなか表に出し難いのは？」

左桜（ギクツ）

周布「ささ、も一つどうぞ」

容堂公「うむ」

桂「・・・」

左桜「だ、大丈夫です。ちゃんと松陰先生がフォローしてくれます」

松陰先生「僕はお酒はあまり・・・」

周布「無礼講だぞ寅次郎！」

容堂公「一本では足りぬな」

高杉「松陰先生は誰のフォローもせんじゃ！」

桂「諭すのが趣味だからね・・・」

左桜「それぞれ、それです！ 諭してくれます」

和奈（不安だ・・・）

大久保「そろそろ大政奉還が近いが、あの男は来てないのか？」

武市「呼ばなくて結構！」

龍馬「たゞけぢい」

武市の腕に顔をすりすりする龍馬登場。

武市「とつとと暗殺されてこい！」

龍馬「酷い言いようやき」

左桜「そういえば龍馬さん。お聞きしたい事があるんですけど、いいですか？」

龍馬「おう、なんちゃー聞いとおせ！」

左桜「途中から倒幕意欲より、商売意欲が勝ってる気がするんですが、その辺のところどうなんですか？」

松陰先生「孟子曰く、慮らずして知る所の者は、その良知なり」

高杉「さすが先生、よく見ていらっしやいますね」

大久保「考えなし、と言う事ではないか・・・」

龍馬「当たつちゆう！」

武市・中岡「おい！」

龍馬「商売は楽しいもんぜよ。倒幕へ繋がる土台は作ったんだ、後はみんなーに任せちよいたら大丈夫やき」

武市「土台の2/3は慎太郎が周旋したお陰だと言う事を忘れてはいまいな？」

龍馬「わしも走りまつちよつたがやか。お陰で大宰府じゃー風邪引いてしもうたし、熱は出るし、後藤さんじゃ見つかるし。苦労は一杯しちゆうんだぞ」

桂「坂本くんの場合、身から出た錆の様な気もしないではないが・・・」

高杉「俺の出番がない」

久坂「まあ、飲め」

中岡「久坂さん！ お久しぶりです！（涙）」

左桜（もうあそこは法治権外だな）

大久保「坂本くんの行動については予測が立てれないのは事実だな」

桂「それが一番厄介なんですよ。大体幕府を潰すのに、新政府に幕

府の人間入れてしまうのはどうかと

左桜「そこまで書いてないから討論しないで下さい（怒）！」

龍馬「勝先生は来てないのか？」

乾「土佐藩邸に遊びにおいで（笑顔）」

和奈「いえ、あの、武市さんに叱られるので遠慮しておきます」

武市「乾さん！」

大久保「章を作り直したり、UPした内容を改変したりと余計なまねをするから遅くなっているのだろう」

桂「確かに」

左桜「う・・・」

大久保「しかも、だ。知らなくていい場面までご丁寧に書いてくれたな、君は」

左桜「ああ、【奇譚十六幕七難八苦 其二薩摩と長州】のラストら辺ですね」

大久保「アピールせんではない！」

左桜「あれはですね、大久保さんのイメージを良くしようと努力した結果です」

大久保「私のイメージが悪いと？」

桂「確かに、独裁者扱いされてましたね、新政府では」

大久保「仮病を使って朝議を欠席する男に言われたくもない」

桂「（ムツ）どこか南の方が聞き分けなくて、苦労されられた拳句の病ですよ」

左桜「まあまあ、お二方とも落ち着いて下さい」

桂・大久保「至って冷静だ！」

松陰先生「左桜くん」

左桜「は、はい！」

松陰先生「孟子は言われました。自ら反みて縮くんば、千万人と雖も吾往かん、と。あなたも、正しいと思った事は相手が誰であろうと、立ち向かう努力を惜しまぬ事です」

左桜「あ、ありがとうございます（孟子、勉強しとこつと・・・）」
桂「先生、それ、嫉けてませんか？（苦笑）」

松陰先生「ああ、お酒がなくなりましたね」

桂（聞いてないし・・・）」

周布「おーい、薩摩の人、焼酎が足りんぞー」

容堂公「畳み回しはいつ見れるのだ？」

大久保「！」

左桜「喋っちゃったよ周布さん・・・」

高杉「俺も三味線弾いていい？」

久坂「詩吟を一つ」

龍馬「ピストルならあるんじゃがのう」

桂「いつそ、回して来たらどうです？」

大久保「桂くん。今、薩摩に来ていいる事を忘れるでないぞ」

桂「威すんですか？」

大久保「忠告に決まっているではないか」

中岡「そう言えば、和太郎に女装させるとか、大久保さん

言ってますたよね？」

武市「！？」

左桜「中岡さん、女装つて変でしょ、それ」

高杉「そんな趣味があるのか、大久保さん」

周布「畳回したしのお、かつかつ（大笑）！」

桂「男装させるからややこしくなるんだ」

武市「女装させてどーすると言うのだ、大久保っ！」

大久保「君まで何を言うか。元々あ奴は女子ではないか」

乾「着物なら私が手配しよう！」

武市「あんたは引つ込んでろ！」

容堂公「つまみはどこじゃ？」

松陰先生「鯛の干物でよければ」

容堂公「うむ」

周布「大体おまえが脱藩なんぞするから、久坂と爺さまが

自棄を起こしたんじゃ」

高杉「謹慎くらつてたの、棚上げにしませんか？」

容堂公「鯛とは旨い物だのう（モグモグ）」

桂「・・・」

大久保「夜も更けた事だし、私は帰る」

桂「さようなら」

大久保「ああ、桂くん。畳の上なんぞで死なせはせんぞ」

左桜「すごいプレッシャーかけましたね」

桂「それがこの男の手だからね！」

左桜「考え疲れたので、辞去させて頂きます」

桂「收拾つてからにしたまえ（怒）」

脱兎！ 左桜、猛ダツシュ！

桂「卑怯者！」

幕末奇譚 『談話室其之二』

左桜「新撰組の皆様、お疲れ様でございます」

沖田「疲れるほど登場させてもらってませんよね（天使の微笑）」
土方「だな」

左桜「えっと・・・ほら、皆さんを一杯書くとですね、なんというか、（汗臭い男の）友情物語になりそうなんで・・・」

バン！

扉を盛大に開けた近藤さん登場。

近藤「私が京都守護職配下新撰組直腸近藤勇だ！」

そして静寂。

土方「（突っ込むなよ）で、あんた入隊するって？」

左桜「（わかつてます）いつどこでそんな事を言いました？」

藤堂「近藤さん、局長が直腸になってますよ（小声で耳打ち）」

┌

近藤「どこだ？」

藤堂「です」

近藤「新撰組”局長”としたことが！ もう一度登場し直す

！」

永倉「誰も気にしてませんから」

近藤「いいいいいよ・・・」 いじける

沖田「題名もかわりますよね（天使の微笑）」

近藤「なに！ タイトルが『新撰組の宴』になるのか!？」

左桜「近藤さんがずっーっとお酒飲んでる小説になりそうなんで却下致します」

近藤「どうせ俺なんて・・・」 再度いじける

土方「言い切るとは、いい度胸してんじゃねえか」

左桜「すぐに柄に手をやるそれ、やめてもらえませんか？」

沖田「タイトル何がいいんですか？ 近藤さんは」

近藤「よくぞ聞いてくれた！ 『新撰組勇士録』て言うのは
どうだ！」

原田「なんか、古い時代劇みたいすね、それ」

近藤 「どうせ古い人間だよ俺は」 またい
じける

沖田 （責任とって、原田さん）

藤堂「『新撰組血風録』つてのもあったよな」

原田「斬りまくってます、って言ってるよなその題名」

近藤 考え中

赤井「ちよつと左桜さん！ なんで俺の腕斬っちゃったんですかあ
（泣）」

左桜「なんでつて言われても・・・物語の都合上？」

赤井「ひでえええ」

左桜「その辺は考えてますから、泣かないで下さい・・・」

近藤「『新撰組、京を守る！』てのはどうだ？」

原田「・・・」

土方「いつまで題名にこだわってんだ！」

近藤「だけどよう、歳」

伊東「『新撰組奇譚 狼達の宴』でよろしいんじゃないありませんか？」

土方「！」

近藤「おおおおおおおっ！ さすがは伊東さん！」

原田「感激屋だよな、近藤さんつて・・・」

伊東「どうでしょう、山南さん」

山南「発言しても取り合ってもらえない総長ですし、なんとも」

土方「あんた、俺を責めてるよな？」

山南「さあ、明里。あちらでゆっくり話しをしようか」

明里「はい」

土方「・・・」

伊東「あなたにも少しは良心の呵責というものがあるようですね」

土方「おい、『伊東襲撃』をとつと書いちまえ（ニヤリ）」
近藤「歳！ ばらしちゃあいかん！」

原田「そくだよ、藤堂も斬られるんだし、そこに触れたらだめっすよ」

藤堂「俺、やつぱ死ぬの!？」

土方「近藤さんが逃がしてくれる」

斉藤「だが隊士にぐっ!」

永倉と原田が口を塞ぐ。

沖田「とどめささなくていいから」

伊東「今後、近藤さん達のお誘いにはのらないことにします」

近藤「それは困る！ 藤堂が死ねなくなる」

藤堂「近藤さん!？」

近藤「あ、ちがう。いや、あつてるのか？」

永倉「松平殿を呼んで説教してもらったら？」

容保公「ここにおる」

一同「!!!!」

近藤「こ、これは松平殿。ささ、こちらでお茶でも一服」

容保公「んむ」

土方「あんた、ほんとに会津藩に弱いよな」

左桜（小説の話ができん）

沖田「銀でも結局幕府に弱い人でしたからね」

斉藤「銀の新撰組は、近藤さん以外も各方面からクレームついて

るからな」

左桜「特に桂さんの扱いが酷くて泣けてくる（号泣）」

永倉「高杉晋作だけだよな、シリアスって」

左桜「『狂』の部分だけ強調されて可哀想（泣）」

土方「てめえ、倒幕派の味方か？」

左桜「だから、刀を抜こうとするの、止めてくださいってば……」

沖田「坂本さんなんて、あれ、もう道化ですもんね」

左桜「あれはあれで、個性を掴んでると言っか、あの独走内容は、

視聴率を得ようと奔走した放送業界が生み出した結果です・・・（あ・・・銀 談義してる場合じゃない）」

沖田「労咳で姉上を殺した作者を僕は許せません（笑）」

近藤「親藩に対する義は通さねばなりませんから・・・云々」

容保公「わしは、早く会津に帰りたい」 幕府・朝廷からお

役御免（辞任）を拒否された人。

近藤「そんな事を申されずに、いましばしの我慢を！」 幕

臣取立てまで待つて欲しい人。

土方「で、なんで俺達呼び出されたんだ？」

沖田「さあ」

左桜「はっ！ そうでした。小説についてご意見を聞こうと思ってたんですよ（やっと本題に入れる）」

土方「桂を斬らせろ」

沖田「僕は岡田以蔵を所望します」

左桜「桂さん殺されたら話が終わりますって」

近藤「！ 次幕から『新撰組奇譚 狼達の宴』か!？」

土方「・・・」

藤堂「赤井くんも希望言ったら？」

赤井「隻腕で役立たずですから、俺（泣）」

大石「女に負けてちゃあなあ・・・」

赤井（グサツ!）

藤堂「突然出て来てトドメさしちゃだめ」

左桜「（焦）えーと、ともあれ、人斬り以外でなにかあつたら助かるんですが」

土方「それ以外の事項が思いつかん」

沖田「僕も」

左桜「だから人斬り集団って言われるんじゃないですか（焦）」

近藤「事実だしなあ・・・」

土方「だな」

左桜「鴨さんといい、これから斬られる人（伊東をチラリ）といい、

なんで正攻法で斬らないんですか？」

近藤「芹さんは神道無念流免許皆伝だし、これからの人も（伊東をチラリ）北辰一刀流塾頭を務めた腕前だから」

沖田「単に怖かったんですよね（微笑）」

左桜「沖田さん、フオローしてあげて下さい」

沖田「持病の癩が・・・」

近藤「い、いかん、良順先生（幕医）をよべ！」

原田「労咳はどこいった？」

沖田「いいんですよ、そんなもん」

土方「やつぱり思いつかん」

左桜「ずっと考えてたんですか・・・」

土方「聞かれたからな」

左桜「（律儀な人だ）そう言えば、土方さんって女性に大変もてたそうですが、本命は誰なんですか？」

沖田「女装した桂小五郎」

土方「！」

左桜「!？」

桂「呼んだか？」

一同「!!!!!!」

土方「捕縛しろ!!!」

桂「じゃ、また」 全力疾走で逃走

左桜（高杉さんを無謀って言えんな、あの人）

土方「何しにきやがったんだ！」

沖田「土方さんが女装した桂にお酌されて、照れてる姿を思い浮かべてしまった」

土方「変な想像してる間あったら追跡しろ！」

沖田「だって、赤井君に僕も変な想像されたし」

赤井「根に持ってたんですか（汗）」

近藤「あの女装なら、わからなくてもないが」

藤堂「実物の桂は、女装しても決して美女にはなりません」

近藤「あれも変装か！」

藤堂「近藤さん、話のつじつまがおかしいよ」

土方「……………」

左桜（倒幕派とは違った個性派揃いだ・・・）

土方「で、次はどんなお題を出すつもりだ？」

藤堂「あ、俳句はどう!？」

土方「!!!」

永倉「地雷踏んだな」

沖田「平助のばか」

左桜「えつとあのその！ ああ、そうそう！ 新撰組に入るのに資格なんてあるんですか!？」

藤堂「俺、まずったの?」

原田「夕餉の白飯、ないと思っとけ」

藤堂「ええええつ!」

伊東「入隊については、尽忠報国の志がある五体満足の健康な男性であればだれでも（ニツコリ）」

沖田「藤堂くんは新撰組脱退してるから、大丈夫でしょ」

藤堂「！ そうだった」

土方「あんたは高台寺へか・え・れ」

伊東「赤井くん、じゃあ帰りましょうか」

赤井「えつ!？」

土方「勝手に引き抜いて帰るな!」

伊東「あら、赤井くんはもう新撰組じゃありませんよ?」

赤井「心の傷をえぐらないで下さい（泣）」

土方「それでもだめ!」

永倉「ああ、それでか」

原田・藤堂・沖田「?」

永倉「藤堂が斬られた原因は俳句だな」

原田・藤堂・沖田「あ、なるほど」

土方「てめえらもむしかえしてんじゃねえ」

藤堂「しくしくしく」

近藤「実技は別に見ないな」

斉藤「既婚者の場合は、屯所から十里（約40km）以上離れた所に妻子を住まわせるとかもあったな」

原田「幹部は例外な」 実は愛妻家で美男子

左桜「なんで近くは駄目なんです？」

土方「妻子の顔なんざ思い出されて、いざって時に命惜しまれたら困るからだ」

左桜「さ、さすが鬼の副長」

近藤「歳は一途なんだよ」

土方・沖田・藤堂・永倉・原田・斉藤（意味が解らん）

土方「幹部になりゃあ、妻でも妾でもなんでも近くに置けるんだ。文句ねえだろ」

近藤「妾は多いほうがいいぞ！」

土方「自分で墓穴掘るのはやめてくれ、隊の士気に関わる」

近藤「お……」

左桜「……ああ、あと新撰組と言えば『局中法度』も有名ですよ
ね」

土方「禁令だ。だれだそんな名前つけたのは」

赤井「えっと、確か子母沢 寛が脚色したらしい、と書いてます」

土方「誰だそれ……ってどこに書いてんだよ」

赤井「昭和三年に万里閣書房から発行された『新撰組始末記』です」

沖田「赤井くん、まだ昭和きてない（耳打）」

赤井「あっ……」

左桜「と、とにかく、その禁令を破ると切腹になるんですね」

近藤「一、土道に背きまじきこと。一、局を脱するを許さず。一、勝手に金策いたすべからず。一、勝手に訴訟を取り扱っべからず。この条々に背候者は切腹申付べく候也」

うんうん、とうなづいて納得する近藤勇さん。

土方「脱走者は発見次第、隊士により討ち果たす。って禁令も出し

たな」

近藤「それ出したの、池田屋襲撃前だったなあ（遠い目）」

左桜「その禁令違反と内部抗争で隊士四十五名がお亡くなりになり、倒幕派との戦いでは六名の方が亡くなられた、と」

土方「いちいち比較すんな！」

近藤「志士より新撰組は強い、と言う事だよ夏月くん！」

左桜「近藤さんってポジティブなんですな」

土方「積極的に出るところが時々間違ってるけどな」

左桜「あ、あと確認がございました。芸州口の戦いまで引つ張らせて頂いた浅葱羽織のダンダラ、池田屋事件で着ておられたのが最後で、以後黒羽織のダンダラに黒袴なんですが、これに変更しても差し支えありませんか？」

一同「黒のがかつこいいから問題なし！」

左桜「一件落着きましたので、では、これにて辞去させて頂きまあいす！ ありがとうございます！」

土方「入隊した日に脱走するとは、馬鹿かてめえ」

左桜「してないし！ 赤井くんに使った手だしそれ！」

赤井「……………」

左桜「では、また！」

沖田「まだあるんだ……………」

左桜 （今回も）脱兎

土方「追え、逃がすなよ！」

隊士「承知！」

左桜 カチツ！ 加速

装置

近藤「さすが桂小五郎の逃げ足だな」

土方「……………」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5917y/>

幕末奇譚 『談話室』

2011年11月18日03時25分発行